

○ 『Hihukusho ラジオ (第86回) 2024.1.30』 報告

(2024年2月15日)

2020年6月より月2回、1時間程度、旧陸軍被服支廠を題材としたラジオ番組「Hihukusho ラジオ」をインターネット配信。

これまで被服支廠の保存の動きに関わりのある人や関心のある人が登場している。今号は第86回目の丸尾さんの発言の要点を紹介する。



ナビゲーター：土屋時子（広島文学資料保存の会代表）

ゲスト：丸尾里栄（広島市立中央図書館をこよなく愛する市民）

インタビュアー：土屋時子

—自己紹介—

岡山生まれ、現在67歳。子供の頃は内気で、かぎっ子で、貸本屋や図書館で過ごすのが大好きで、本を友に育つ。3人の息子を持ち、夫の転勤に伴い、現在2度目の広島住まい。

—中央公園—

子供が小学生の頃は、子ども図書館、子ども科学館、ファミリープールなどよく利用し、楽しく過ごした思い出が多い。育児が一段落してからは、一人で中央図書館に通い、緑豊かな環境に囲まれた中で文化の香りを満喫する。このエリアは子供たちや文化的なゾーンとして大きなビジョンをもって整備されたものであろうと漠然と感じていた。

それが中央図書館の移転問題を契機に疑問を持ち始め、中央図書館を調べるきっかけとなり、初めて浅野図書館のことを知る。

—浅野図書館から中央図書館へ—

浅野家が大正15年に広島市小町に浅野文庫等を収蔵する浅野図書館を開館。昭和6年に市に寄贈し、広島市立浅野図書館と改め、市初の公立図書館となり、後に広島県中央図書館に指定される。先の戦争末期に貴重な収蔵品等は疎開させたが、昭和20年に被爆し消失。

昭和21年に比治山の山陽文徳殿にて図書館業務を再開し、昭和24年に小町に復帰開館。昭和30年に国泰寺町（現在の市議会棟の位置）に新築・移転し開館。南側のバイパス（現国道2号線）の開通に伴い騒音問題が発生。移転先として現在地の中央公園に建設し、広島市立中央図書館として昭和49年に開館。併せて、浅野家の文化的業績を末永く顕彰するため「浅野文庫」を館内に設置。

—中央図書館移転問題が発生—

（土屋）現地建替えと思い込んでいたら、突然広島駅前の百貨店に移転という話が飛び込み、反対の署名活動を展開する。その頃、2年前に丸尾さんと知り合う。

（丸尾）いろいろ調べていくうちに、旧広島藩最後の藩主浅野長勲（ながこと）公が図書館を寄贈した郷土愛や中央公園への移転を決めた当時の山田節男市長の熱い思いを知る。

山田市長は市議会で「国際平和文化都市にふさわしい図書館を目指し、図書館は市民みんなが使える知的宝庫だから、いくらお金をかけても贅沢ではない」と所信を披歴している。

この浅野さんと山田市長の話を知ったとき、そんな理念があったから、司書たちや職員も一生懸命努力して、今こんな素晴らしい図書館があるのだと胸を打たれた。

（土屋）戦後すぐに山陽文徳殿で図書館業務を再開する際、疎開させていた収蔵品をリアカーで運搬し、その労苦がたたって館長の命を縮めたという話もある。

（丸尾）この歴史的な意味や成り立ちを無視して、古くなったからと簡単に他所に移転させ、跡を解体するのはおかしいと思う。

（土屋）中学・高校生の頃、よく学校の帰り道に浅野図書館に寄って、本や新聞を読んでいた。学校の図書館とは違う文化的存在を認識させられた図書館であった。

最近中央図書館に通うと1階が自習室になっており、窓から見える木々の緑の安らぎを感じながら、学生たちが一生懸命勉強している姿に感銘する。

—浅野文庫と広島文学館の建設の動き—

（土屋）1月の市議会総務委員会で「浅野文庫等施設（仮称）整備基本計画（案）」が提出され、中央図書館に在る浅野文庫と広島文学資料室を浅野家とゆかりの深い市長公舎敷地に建設する案が提示された。

突然の話でびっくりしたが、場所は縮景園に隣接し、市長公舎の前は浅野家の居住地であり、適地と思う。まだ建設場所と大まかなスケジュールが示された程度なので、施設の内容についてはこれから十分検討して市に要望を出していきたい。

文学館は全国的に増えており、図書館との併設や博物館との併設もある。個人的には浅野文庫と共に博物館法に基づく施設にした方がよい様思う。

—広島のみちづくりの動きについて—

(丸尾) 平和に取り組む姿勢は他の都市では感じられなかった。子供たちの学習を通して平和教育の話の聞いたり、アニメを見たり、平和に関心を持つようになった。

広島は原爆からの復興を目指して、平和を大事にするまちづくりが進められていると思っていたが、中央図書館移転問題以降、平和公園とパールハーバー公園の姉妹縁組等々、一連の問題に接して、おかしな方向に進んでいるのではないかと思うようになった。

市長も国際平和文化都市と公言しているが、大きな事業に重きが置かれ、子どもや老人など、弱い立場の人への配慮が欠けている様に思う。サッカースタジアムも待ち望んでいる人には喜ばしいことかもしれないが、そのために周りの人たちに我慢を強いたり、寂しい思いをさせることがあってはいけない。真の平和文化都市は市民一人一人が豊かな気持ちで生活でき、身近なところから平和を作っていこうという声が出せるのが文化ではないかと思う。

(土屋) 賑わいも必要だが、一方で緑の安らぎ空間も大事にしてほしい。図書館は文化の発信拠点であり、図書館をどう扱うかが都市政策を占うバロメーターとなる。今の状況は歯がゆい思いで一杯である。

—被服支廠の保存・活用について—

比治山近くに住んでいた頃は保存運動もなく、近くを通っても何も感じていなかったが、昨年12月に見学会で建物の中を案内してもらい、規模の大きさに圧倒され、軍都広島と被爆後の救護所の実態を知り、戦争のむなしさを実感した。

被服支廠1号棟は市に移管されて、平和を伝える場として使用されることが決まったようだが、それをしっかり実現してほしい。

また被服支廠は原民喜や峠三吉や四國五郎のゆかりの地でもあるので、何らかの形で記念物を残してもらいたい。

—中央図書館開館式の山田節男市長のあいさつ文（パンフレットより）—

(土屋) 山田市長は平和記念式典の宣言の中で初めて核廃絶を訴え、核実験のたびに抗議電報を打っていた。中央図書館建設にも情熱を注いでいたが、職務中に倒れられ、無念にも1974年10月の開館式には出席できなかった。そして翌年1月に帰らぬ人となる。

開館式に配られたパンフレットの中の市長のあいさつ文を以下、紹介する。

開館にあたって

自由な市民相互の知的交流の場という新しい使命を担って、ここ広島市の都心に多くの関係各位のご協力によりまして市立中央図書館が誕生いたしました。

この新しい図書館は過去50年の長い歳月にわたり卒業証書のない自己学習の場として貢献してまいりました旧浅野図書館の伝統を受け継ぎ、さらに現代社会の要請に応える魅力ある図書館、利用価値の高い図書館として新生するために様々な工夫を凝らしました。

史料によれば昭和24年に成立しました広島平和記念都市建設法に基づく施設計画試案の中に国際規模の図書館の建設が盛り込まれております。爾来20数年、今日ようやくこの《ヒロシマ平和都市法》の精神にも合致する図書館を実現することができました。

かねてより私は図書館事業の発展が市民文化の高揚に不可欠な前提であると考えておりました。この新しい図書館が未来社会をつくる世代の文明史観への関心と市民社会の成熟化のために奉仕し、皆様が知識と心のオアシスとして気軽にご利用くださることを祈念してやみません。

昭和49年10月 広島市長 山田節男

コメント

一市民の立場で中央図書館移転に反対運動を起こされたことに敬意を表したい。市の第3セクターの経営を立て直すために図書館を移転させるのは誰が考えても不条理であり、議決されたからといって決して諦めるべきではないと思う。市民の正義を信じたい。

(瀧口信二)